Osaka University Knowledge Archive

Title	大阪大学看護学雑誌　20巻1号 新任特集
Author(s)	遠藤, 淑美; 神出, 計; 渡邊, 浩子
Citation	大阪大学看護学雑誌. 2014, 20(1), p. 65-67
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/56818
rights	©大阪大学大学院医学系研究科保健学専攻
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

—新 任 特 集—

就任のご挨拶

2013年4月付けで看護実践開発科学講座の教授として就任致しました．大阪大学には2005年秋よりお世話になってまいりました．この間，昨年退官されました荻野先生，阿曽先生，三上先生はじめ多くの先生方にお世話になりました．特に私の研究領域である精神保健看護学は，私を含め2名の教員で運営していたため，医学研究科の武田先生には，精神医学に関して多くのご協力を現在も頂いているところです．

精神保健看護学という領域に私が関心を持ったのは，大学時代に出会った恩師の影響が大きくあります．「私」がままならず，「私」を持てあましていた私は，看護することに向き合うことができずにいました．私の視点は，「私」に向いていて，患者さんに向くことが困難だったわけです．そのような中，ちょうど私が大学4年の時，日本看護協会会長をされた見藤隆子先生，そして産業カウンセラーの上級指導者である横田碧先生という，ベテランのカウンセラーから指導を受ける機会を得ました．大学時代，私はお二人から話を聴いていただくという体験を通して，「人の話を聴く」とはどういうことかを学びました．これが援助をするときの私の原点になっています．

大学卒業後，保健師，看護師として仕事をしたときに，改めて理論の大切さに気づきました．これには，ナイチンゲールを基礎とした看護理論家である薄井坦子先生の影響が大きくあります．現場はいつも，「看護とは何か」「何をすることが看護したことになるのか」を私に問いかけてきます．そのたびに立ち戻ったのが看護理論であり，具体と抽象を上り下りする思考のあり方でした．

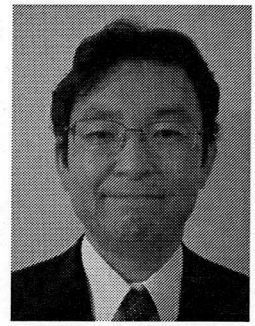
私は，途中，看護とは別の道を進んだこともあります．別の領域を知ることで，改めて看護の独自性を理解したように思います．看護という素晴らしい人間の営みに縁があったことに感謝しつつも，その営みを伝えられる立場にいるということを，重く受け止めています．

研究では，看護という複雑な事象を扱うにあたって，必然的に質的な研究に関心が向くことになりました．さまざまな変数が絡み合うのが臨床現場であり，その中で看護師は，患者さんにとってその時もっともよいと思われる方法を判断し選び取っていきます．ですから私は，変数に切り分けるのではなく，現場で生じる事象そのままに，実践の文脈に潜むあり方やパターンを見出すことに関心があります．

現在は，精神看護の領域ではこれまであまり関心が向けられてこなかった，「身体」から入るアプローチに関心があります．看護師がそれを意識して用いることによって，どのようにケアが変化し，ひいてはそれが，どのように患者さんの力につながっていくかということを明らかにしようとしています．看護がなしえるのは，変化する環境にとどまりながらも何千年と生き続ける木のように，患者さん自身が，自身を守っていける自然治癒力をいかに助けるかだと考えています．

教育，研究，社会貢献と未熟な点が多々ありますが，精進してまいりたいと思います．今後ともなお一層のご指導，ご鞭撻のほど，どうぞよろしくお願い申し上げます．

大阪大学大学院医学系研究科保健学専攻
統合保健看護科学分野　看護実践開発科学講座
遠 藤　淑 美



保健学科に赴任して

平成25年4月1日付けで大阪大学大学院医学系研究科　保健学専攻　総合ヘルスプロモーション科学講座の教授に就任いたしました。私は保健学科赴任前に医学科の老年・腎臓内科に所属しておりまして、当研究室の先代教授である三上　洋先生は医局の大先輩にあたります。三上先生は数多くの優秀な医療専門職を育成し、介護保険や高齢者医療の研究で多くの業績を残されました。研究室の伝統を継承し、さらに発展させるべくしっかりと精進していく所存でございます。

私は平成 2 年に高知医科大学を卒業後、老年医学に興味がありましたので当時、荻原俊男先生が主宰する大阪大学医学部老年病医学講座に入局いたしました。阪大病院、大阪府立成人病センター第 1 内科（循環器内科）で臨床研修を行った後、高血圧研究室で心肥大や動脈硬化など高血圧合併症の成因に関わる研究に従事いたしました。さらにその基礎的なメカニズムを追求するために米国 UCLA に 3 年間留学いたしました。帰国後は当時ミレニアムゲノム・プロジェクトが開始されていた国立循環器病研究センター　高血圧・腎臓内科に赴任し、臨床を行う傍ら、遺伝子解析研究グループのサブリーダーとして研究所の先生方と共同で新規高血圧関連遺伝素因を複数明らかにいたしました。平成 21 年に樂木宏実教授の老年・腎臓内科学講座に帰局し、健康長寿の要因を解明するため、大阪大学人間科学部、歯学部の先生方と共同で高齢者を対象にした長期縦断研究を開始しました。本研究は今後の高齢者医療の目指す方向性や自立した健康長寿の高齢者を増やすことにつながるエビデンスを多く出せる可能性のある研究と考えております。

今後、保健学専攻で私が行うべきことは、我が国の医療において中心的な役割を担っていく医療専門職を育成し、超高齢社会における医療の進歩に貢献できる研究を行っていくことに尽きると考えています。赴任してようやく 8 カ月が経ったところですが、保健学科にはすばらしくモチベーションが高く優秀な教員の先生方、そして真面目でやる気にあふれた大学院生や学部学生がたくさんおられます。このような皆さんと大きな成果を阪大保健学科から世界に発信して行きたいと思っています。

そのように意気込んでおりますが、看護の領域で教育や研究を行うのはこちらに来て初めてです。まだまだわからないことも数多くありますので看護の先生方には何とぞご指導、ご鞭撻を賜りますよう心よりお願い申し上げます。

大阪大学大学院医学系研究科保健学専攻
統合保健看護科学分野　総合ヘルスプロモーション科学講座
神　出　　計

—新 任 特 集—

妊孕世代の女性の健康支援を目指して

2013年4月に生命育成看護科学講座に着任致しました。

私は、助産師として東京都内の大学病院の産科病棟と新生児集中治療室で周産期医療に携さわった後、オーストラリアのニューサウスウェールズ州に位置するウーロンゴン大学大学院修士課程で助産学を学びました。在学中は外来・病棟実習、20例の分娩介助実習、在宅実習を通して、日豪間の周産期医療の違いを体験する機会を得ました。留学当時の90年代の帝王切開の術後管理を例に挙げると、2日間の絶対安静、約10日間の入院が日本のスタンダードでした。一方、オーストラリアでは術後2時間でシャワー浴、72時間以内で退院という超スピーディーな管理がされていました。また、今でこそ日本でも助産師外来、院内助産院等が開設され、助産師の専門性が発揮できる場が提供されていますが、オーストラリアでは既に正常経過の妊産婦に限り、妊婦健診、分娩管理が助産師のみで行われていました。繊細さに欠けるオージーのケアに驚くことも度々ありましたが、「Welcome to the world !」と言って、幸せそうに赤ちゃんを取り上げるオージー助産師の姿は忘れられない思い出となっています。臨地実習を通して確信したことは、日本の看護は診断力、実践力、ケアの質共に世界でも十分通用する！ということでした。

帰国後は東京大学大学院国際保健学専攻の修士・博士課程で研究の基礎を学び直しました。大学院ではライフワークとなる「成人病胎児期発症説からみる周産期管理」というテーマに出会い、次世代の健康を規定する因子を疫学調査、動物実験から探りました。教室では「とことん考えて、とことん議論する！」が鉄則で、常に探求心を持って、意見をぶつけ合い、研究成果を世界に発信することの大切さを学んだ5年間でした。

本学着任後、ウィメンズヘルス科学教室を立ち上げました。本教室の使命は、次世代の健康を担う妊孕世代の女性の健康支援です。近年、妊孕世代の女性は、やせ、低栄養、性感染症、晩産化、不妊・不育症と多くの健康課題を抱えています。これらの課題は自身の健康のみならず、次世代への健康にも大きく影響を及ぼします。そのため、妊娠前からの健康な体づくりが重要と考えます。ライフステージ各期の健康課題を女性自身が認識し、心身の健康の保持・増進を図るための自己管理能力の向上を最終ゴールとし、助産学、母子保健学の向上に寄与できる研究に取り組んで参ります。ご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

大阪大学大学院医学系研究科保健学専攻
生命育成看護科学講座　ウィメンズヘルス科学教室
渡 邊　浩 子